

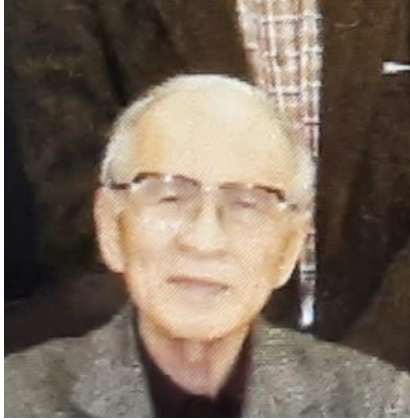
訃報

被爆者協会の副会長もされた大畑茂徳さんが昨年 12 月 12 日にお亡くなりになりました。95 歳でした。

1926 年 1 月 1 日に石川県で生まれ函館へ。通信士として樺太に、その後召集され広島の暁部隊に配属、そこで被爆しました。北海道被団協の結成に参加し理事、1994 年からは 16 年間副会長でした。

1995 年から始まった日本被団協の原爆被害者調査では北海道の責任者として活躍。この時の経験を生かして網の目相談、日常相談、原爆症認定手続き等被爆者相談を担った中心のおひとりでした。

ご生前のご労苦に感謝し、心よりご冥福をお祈り致します。

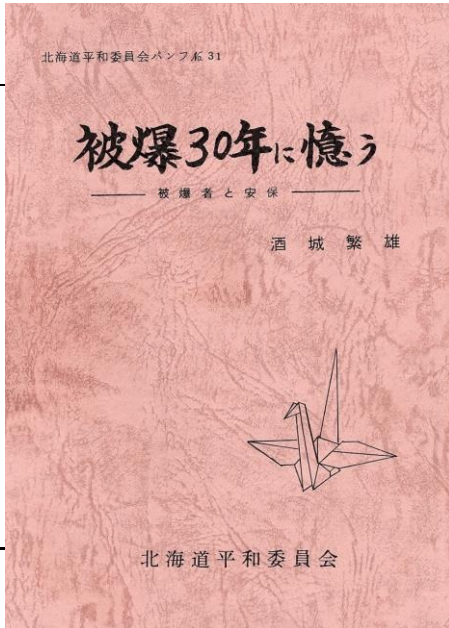


先輩の足跡をたどるー酒城さんのパンフを復刊

北海道平和委員会は 1975 (昭和 50) 年に「道平パンフ第 31 集」として、当時北海道被団協(現被爆者協会)の事務局長をされていた酒城繁雄さんの『被爆 30 年に憶うー被爆者と安保』を発売した(A6 版、48 ページ)。北海道平和委員会はその後被爆者の証言集である『北の被爆者』第 1 集、第 3 集を出版し「被爆者」と一体の運動」を目指した。

私は当時このパンフレットに大きな感銘を受けた。ところがこのパンフは平和委員会にも残っていない。かろうじて被爆者協会の図書室に 1 冊があった。この度平和委員会の了解を得て若干の部数をひと回り大きい A5 版で復刻した。いま改めてそれを読み返す。

これは被爆者運動の貴重な証言である。何といっても酒城さんの語りがいい。「崩れるような笑顔」で語った白いヒゲの無核(後に自らこう名乗った)さんを懐かしく思い出す。



新たな問題を抱えているが、被爆者に対する医者の無理解を求めていく取り組み、援護法を求めたたたかい、それが個々の被爆者の健康状態や生活実態をふまえて縦横に語られる。被爆者はどんな時自らの体験を語るのか、慰霊祭は被爆者だけのものではない、被爆者は安保を告発する、それぞれがそれぞれの角度で運動しそれをつないでいく等々、被爆者にかかわる平和運動への提言もある。最後に付された網走と札幌平和委員会の「被爆者交流餅つき大会」の短い記事も感動的である。

酒城さんは類まれな「ストーリーテラー」である。いくつもの個別の事実を見事に論理的につなぎ、しかも平易な言葉で語り下ろす。先輩たちの被爆者援護、核兵器廃絶をめざすこうした無数のたたかい、そしてそれに連帯した市民の平和運動、それこそが核兵器禁止条約を国際法に押し上げた最も中心的な力であった。読むたびに新しい発見がある。

(北明邦雄)

ご希望の方はご連絡下さい。

ある日の出来事から

たまたま散歩の途中トイレを借りにきた男性がいた。「ここで囲碁をやっているの?」「ここはヒバクシャ会館といって被爆の遺品をいろいろ展示しているのです。実は北海道には被爆者が多いのです」。

30 分くらい後に今度はご夫妻で来館。二人とも 80 歳を過ぎていた様子で、奥様は足が悪い。ゆっくり階段を上り、やがて展示を見て降りてきた。「20 年ほど前に広島、長崎の資料館を見てきた。それを思い出した。本当にひどいもんだ。こんなことするもんでない。」と感想を語ってくれた。

聞くと近くにお住まいとのこと。ヒバクシャ会館が地域の平和祈念館として定着していつてほしいですね。(まちこ)

お知らせとお願い

戦後 76 年、戦争体験や被爆体験を語り出すことのできる人が少なくなっています。「モノが語る」時代に入りつつあります。身内の方、お知り合いの方がお持ちの被爆の実相を物語る遺品、ご寄贈頂けるものがあればご連絡下さい。